■　IPCC 特別報告書の執筆者会合に査読編集者として出席

パチャウリ統合議長が率いるIPCCは昨年ノーベル平和賞を受けたことは有名ですが、IPCCは、次期報告書（AR5）の発行に先だって特別報告書「気候変動への適応推進に向けた極端現象及び災害のリスク管理」（IPCC-SREX）を作成することを決定しました。世界中から統括執筆責任者、主執筆者、査読編集者が選定されました。そのための第3回（全体では4回の会合を予定）の主執筆者会合が10月25日～29日にジュネーブで開催され、日本からの下記の7名の参加者の一人として参加してきました。

＜1章_RE＞　竹内邦良　（土木研究所ICHARMセンター長）
＜3章_LA＞　鼎　信次郎（東京工業大学大学院情報理工学研究科　准教授）
＜4章_CLA＞本田　靖　（筑波大学大学院人間総合科学研究科　教授）
＜4章_LA＞　高橋　潔　（国立環境研究所地球環境研究センター 主任研究員）
＜6章_RE＞　増本隆夫　（農村工学研究所　地球温暖化対策研究チーム長）
＜8章_LA＞　沖　大幹　（東京大学生産技術研究所　教授）
＜8章_RE＞　三村信男　（茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター 教授）
注）CLA：統括執筆責任者、LA：主執筆者、RE：査読編集者

筆者の担当は第6章です。特別報告書SREXの主執筆者会合は、パナマでの第1回、ハノイにおける第2回と既に開催されてきましたが、査読編集者としては今回の第3回専門家会合からの出席となりました。IPCC AR4の作成後に問題となった不十分な証拠の採用問題などの反省もあることから、査読編集者や彼ら（我々）が行う検討作業は、以前に増して重要となってきているようです。

第6章の議論に限れば、査読編集者（英国と日本）としての2名も、査読を含めた論議の方向や章全体の執筆方向に対しても有用な意見を出すことができ、所期の貢献ができたと感じています。特に、担当部分が国レベルの温暖化対応方針に関する章であることから、著者らが現在行っている温暖化・災害研究の分野に近い感を得ました。ただし、第6章における日本などの先進国の記述が少ないこと、章内の執筆内容は引用文献の纏めやその中からの意見の繰り返しだけのことも多く、次の段階としてさらなる分析を行った記述が必要と感じました。このような状況の中、発表を主とする国際会議とは違った全員参加型の討議は大変面白く、ハードであった一方で有意義なものとなりました。

★この会合の詳細に関心のある方は、以下の資料をご覧下さい。
http://nkk.naro.affrc.go.jp/merumaga/08/01-03-02.pdf

IPCC のパチャウリ統合議長に会うことができました。早速、記念写真を撮らせていただきました。

スイスジュネーブの世界気象機関（WMO）で開かれた会議には、約 120 名が集まり、全体会議では、このように皆がパソコンを広げていました。インターネットはパスワード無しで入れます。

担当の第 6 章の分科会の様子です。手前が統括執筆責任者や主執筆者たちで、査読編集者が奥の 2 名（英国人と増本）です。

6 章担当分科会メンバーの息抜きの時間です。会議は朝から晩までかなりハードで、執筆者たちは皆、精力的でした。通常の開始時間を独自に 1 時間早めた早朝開始や、全体会議の閉会後の 6 章だけの個別の集まりなど、プログラムにない議論にもその姿勢は現れていました。